

クレジット:

UTokyo Online Education 学術俯瞰講義 2016 納富信留

ライセンス:

利用者は、本講義資料を、教育的な目的に限ってページ単位で利用することができます。特に記載のない限り、本講義資料はページ単位でクリエイティブ・コモンズ 表示-非営利-改変禁止 ライセンスの下に提供されています。

<http://creativecommons.org/licenses/by-nc-nd/4.0/>

本講義資料内には、東京大学が第三者より許諾を得て利用している画像等や、各種ライセンスによって提供されている画像等が含まれています。個々の画像等を本講義資料から切り離して利用することはできません。個々の画像等の利用については、それぞれの権利者の定めるところに従ってください。



2016 年度学術俯瞰講義 第 4 回 4 月 27 日  
ソクラテスという「哲学者」の誕生  
第 1 回：ソクラテスは何故死刑を受けたのか？  
納富信留（文学部・哲学）

1、ソクラテス裁判という哲学事件

(1) ソクラテス裁判

\*ソクラテス（前 469 頃～399 年）、前 5 世紀後半のアテナイ社会と文化

\*前 399 年に「不敬神」の罪状でアルコン・バシレウスの役所に訴えられる；裁判で死刑判決、1 月後に牢獄で処刑（毒杯）

アニュトス、ミレトス、リュコン連名の告訴状

「ソクラテスは、ポリスの信ずる神々を信ぜず、別の新奇な神霊（ダイモーン）のようなものを導入することのゆえに、不正を犯している。また、若者を墮落させることのゆえに、不正を犯している。」（納富信留訳、光文社古典新訳文庫、9 頁）

(2) ソクラテス文学 (Socratic Literature, *Sōkratikoí Logoi*)

\*前 392 年頃、ソフィスト・ポリュクラテスのパンフレット『ソクラテスの告発』

\*アンティステネス、アイスキネス、パイドン、エウクレイデス（以上、全て断片）、クセノフォン『ソクラテスの思い出』『ソクラテスの弁明』『饗宴』『家政論』（4 作現存）  
とりわけ、『ソクラテスの思い出』第 1 巻で、ポリュクラテスに反論

\*クセノフォン『ソクラテスの弁明』冒頭

「さて、ソクラテスについてその記憶を記録にとどめ、かれが裁判に呼び出された時、弁明ならびに人生の終わり方についてどのように思索したかについて記すことは、価値があることと私には思われる。たしかに、そのことについては他の人々もまたすでに書いているし、そのすべての者がかれの高言（メガレーゴリア）に触れている。そのことからして、ソクラテスによって実際にそのように語られたことは明らかである。しかし、もはや死のほうが生よりも自分にとって望ましいものであるとかれが考えていたという事実——そのことを他の人々は十分に解き明かしていない。その結果、かれの高言は、いささか思慮に欠けたものであるように見えるのである。」（三嶋輝夫訳、講談社学術文庫、209 頁）

(3) 「真実の創作（フィクション）」

\*プラトンの臨席（33c-34a、38b の 2 箇所のみ）：傍聴人として臨席か？

対話篇著者の不在：『パイドン』59b「プラトンは病気だったと思います。」

\*作品の構成

## 【第一部 告発への弁明】

前置き 第1～2章

古くからの告発への弁明 第3～10章

新しい告発への弁明 第11～15章（メレトスの吟味）

哲学者の生の弁明 第16～22章

弁明の締めくくり 第23～24章

〔ここで有罪・無罪の投票がなされる〕

## 【第二部 刑罰の提案】 第25～28章

〔ここで死刑・罰金刑の投票がなされる〕

## 【第三部 判決後のコメント】 第29～33章

### (4) 「哲学」問題としての『弁明』

なぜ『弁明』が哲学の古典なのか？「哲学 *philosophia*」とは何か、どう始まったのか？

「哲学者 *philosophos*」として生きること、死ぬことの真髄、私たちへの問いかけ

## 2、プラトン『弁明』その冒頭部

Ὅτι μὲν ὑμεῖς, ὦ ἄνδρες Ἀθηναῖοι, πεπόνθατε ὑπὸ τῶν ἐμῶν κατηγορῶν, οὐκ οἶδα· ἐγὼ δ' οὖν καὶ αὐτὸς ὑπ' αὐτῶν ὀλίγου ἐμαντοῦ ἐπελαθόμεν, οὕτω πιθανῶς ἔλεγον. καίτοι ἀληθές γε ὡς ἔπος εἰπεῖν οὐδὲν εἰρήκασιν. (*Ap.* 17a1-4)

アテナイの皆さん、皆さんが私の告発者たちによってどんな目にあわれたか<sup>(注)</sup>、私は知りません。ですが、私のほうは、あの人たちのおかげであやうく自分自身を忘れるところでした。それほど説得力をもって、彼らは語ったのです。しかし真実は、あの人たちは、いわば何一つ語りませんでした。(納富信留訳、光文社古典新訳文庫、16頁)

(注)「目にある」と訳した動詞 *paskhō* は、従来「印象を受ける」等と訳されてきた。しかし、「害悪を被る」(33d、35a)、「罰を受ける」(36d、37b)、「報いを受ける」(42a)といった重要な用例との対応から、このように訳す。

\*従来の訳：「アテーナイ人諸君、諸君が、わたしを訴えた人たちのいまの話から、どういう印象を受けられたか、それはわからない。しかしわたしは、自分でも、この人たちの話を聞いていて、もう少しで自分を忘れるところだった。そんなに彼らの言うことは、もっともらしかったのだ。しかし本当のことは、ほとんど何も言わなかったとい

\*動詞 *paskhein* の用例（『弁明』で10箇所）（以下全て納富信留訳、光文社古典新訳文庫より）

33d7「自分の親族が私によってなんらかの害悪を被った *ἐπεπόνθεσαν* わけですから。」

35a6「死刑にでもなったらさぞひどい目に遭う *πείσεσθαι* と考えているのですが」

36b5 「人生を平穩に過ごさなかったという理由で、どんな処分を受けたり παθεῖν、支払いをしたりすれば、私に相応しいのでしょうか。」

36d1 「さて、私はこういった人間なのですが、一体何を受ける παθεῖν のに値するのでしょうか。」

37b5 「メレトスが私に求刑したことを受けない πάθω ようにと、恐れてででしょうか。」

42a1 「もしあなた方がこのことをして下されば、私自身も息子たちも、あなた方から正しい報いを受けた πεπονθώς ことになるでしょう。」

\*聴衆への呼びかけ・挑発：問われているのは、裁判員（正義の判決を下す人）、そして読者の生き方である！

### 3、古くからの告発に対して

(1) 二種の告発者の区別、そのうち「古くからの告発者」への弁明

\*曖昧、裁判の戦略として無意味？ かえって逆効果？

誰？ 裁判員、アテナイの人々たち（子供の頃から聞かされ、信じ込まされてきた）

(2) 「知者 sophos」という非難

\*古くからの告発（告訴状の形式で）

「ソクラテスは不正を犯し、余計なことをしている。《a》地下と天空のことを探求し、《b》弱論を強弁し、《c》またまさにその類いのことを他の人々に教えることで。」

(19b-c)

《a》天空＝神々の世界、地下＝冥界：自然探求は伝統的宗教への挑戦

《b》「弱い言論を強くする（見せかける）」、プロタゴラスらソフィストの弁論術

《c》若者への教育（ソフィストが標榜する職業）、新思想への保守的な警戒・反発

《a, b, c》について、ソクラテスは身に覚えもないし、証人もいないはず

「だが、ソクラテスよ、君のやっている事とは、一体何なのか？ どこから君にそんな中傷が生じてきたのだ？」 (20c)

\*デルフォイのアポロン神託「ソクラテスより知ある者はいない」→「人間的な知」

「神は、一体何をおっしゃっているのだろう。何の謎かけをしておられるのだろう。

私は、知恵ある者であるとは、自分ですこしも意識していないのだから。」 (21b)

(3) 「不知の自覚」（流布する「無知の知」という言い方は誤り）とその促し

\*政治家、詩人、手仕事職人と順に訪ねて、吟味・論駁 (elenchos)

「私はこの人間よりは知恵がある。それは、たぶん私たちのどちらも立派で善いことを何一つ知ってはいないのだが、この人は知らないのに知っていると思っているのに対して、私のほうは、知らないので、ちょうどそのとおり、知らないと思って

いるのだから。どうやら、なにかそのほんの小さな点で、私はこの人よりも知恵があるようだ。つまり、私は、知らないことを、知らないと思っているという点で。」

(21d)

\* ソクラテスによる神託の解釈：「人間的な知恵」

「神託は、このソクラテスについて語っているように見えても、実は私を例にして、私の名前をついでに使っているだけなのです。ちょうどこう言っておられるように。『人間たちよ、ソクラテスのように、知恵という点では真実にはなににも値しない」と認識している者が、お前たちのうちでもっとも知恵ある者なのだ』と。」(23a-b)

(4) 怒り、憎悪、真実の開示

「アテナイの皆さん、今まで述べてきたことが真実であり、皆さんにすこしも隠し立てせず、ためらうことなくお話しています。しかしながら私は、まさにこのこと、つまり真実を話すということに憎まれているのだということ、よく知っています。そして私が憎まれているというまさにそのことが、私が真実を語っていることの証拠でもあり、そして、私への中傷とはまさにこういうもので、これが告発の原因であるということの証拠でもあるのです。」(24a)

\* ソクラテスを告発したのは誰か？ 彼を死刑にしたのは何故か？

それは、哲学者という生き方の問題

「哲学者 φιλόσοφος」＝専門家ではなく、知を愛し求めて生きる人間そのものである

#### 【参考文献】

プラトン『ソクラテスの弁明』、納富信留訳、光文社古典新訳文庫、2012年

W. S. M. Nicoll, E. A. Duke et al., *Platonis Opera I*, Oxford Classical Texts, 1995

John Burnet, *Plato's Euthyphro, Apology of Socrates and Crito*, Oxford University Press, 1924

納富信留『哲学者の誕生 ソクラテスをめぐる人々』、ちくま新書、2005年

——『プラトン 哲学者とは何か』、NHK出版、2002年

——『プラトンとの哲学—対話篇をよむ—』、岩波新書、2015年

——「ソクラテスの不知—「無知の知」を退けて」、岩波書店『思想』948、2003年4月

プラトン『ソクラテスの弁明』、田中美知太郎訳、新潮文庫他、1959～1975年；三嶋輝夫訳、講談社学術文庫、1998年、他多数

田中美知太郎『原典プラトン・ソクラテスの弁明』、岩波書店「ギリシア・ラテン原典叢書」1950年／1974年

T. C. ブリックハウス、N. D. スミス『裁かれたソクラテス』、米澤茂、三嶋輝夫訳、東海大学出版会、1994年